

教育実践の取り組みと成果「初年次教育」

鈴木 浩 子*

1. はじめに

初年次教育授業「自立と体験1」は、その計画のプロセスが明星教育センターの開設につながった科目であり、センターの教育実践の主軸となる取り組みであった。

明星教育センターの特色である「アクティブ・ラーニング」「多様性からの学び」「体験による学び」は、「自立と体験1」の授業を計画し、授業内容を改善する中で明確になり、形作られてきたとも言える。明星教育センターの10年を振り返るにあたり、改めて「自立と体験1」がどのように実践され、どのような成果を達成したかを見直し、今後を展望したい。また11年目となる2020年度は、新型コロナ禍の影響で対面での授業実施ができず非対面での授業となった。この経緯を記録することで、今後の「自立と体験1」を検討する端緒としたい。

2. 開講の経緯

「自立と体験1」は、2010年度に開講した。それ以前も学科ごとの初年次教育科目は実施されていたが、学習意欲や学力の低下等による離籍者の増加という直面する課題に対応するために、全学の学生が共通に履修する初年次教育科目を開講することの必要性が高まっていた。そのため、2008年から検討を開始し、2010年4月に、明星教育センターの開設と同時に、「自立と体験1」が開講された。

開講3年目までは、授業の組み立て、共通教材・教案に関して、大幅な変更を行った。4年目以降も、履修者アンケート、教員アンケート、スチューデント・アシスタント（以下、SA）アンケートを元に改訂を重ね、2016年度には共通教材（ポートフォリオ）の出版に至った。

3. 実践状況

3-1. 授業概要

「自立と体験1」は1年生前期必修科目で、明星大学の教育目標「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」を具現化することを目指してデザインされた。教育目標は「明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助け、各自の理想や目的を明確にしていくこと」、到達目標は「他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること」である。

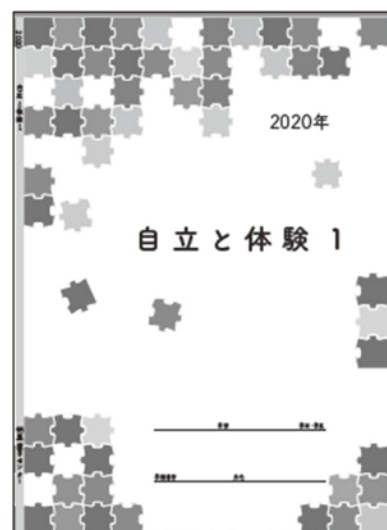


図1 「自立と体験1」ポートフォリオ

* 明星教育センター常勤教授

3-2. 授業の特徴

「自立と体験1」は、明星教育センターを中心に大学全体で取り組むことにより特徴的な授業運営を実現してきた。

具体的には、①学部学科横断型のクラス編成(70クラス)、②少人数制(30人)の協同学習、体験学習、③各学部の専任教員を中心とした授業実施、④共通シラバス、共通教案、共通教材(ポートフォリオ)による授業実施、⑤SA／TA、SA コーチによる授業サポート、⑥多様なメンバーが関わる授業実施である。

受講する1年生、担当教員、先輩学生(SA/TA)、学長、各部署の職員が、それぞれの立場で1年生に接し、授業を構成している。2020年度はデザイン学科の4年生にポートフォリオの表紙デザインを依頼した。

このような授業の特徴が、「自立と体験1」の多様性からの学びにも繋がっている。

3-3. 授業が目指すもの

「自立と体験1」は、初年次教育科目であると同時に、明星教育センターが所管する体系的キャリア教育科目のスタートとなる授業である。

初年次科目としては、初年次教育の目的(河合塾初年次教育調査報告 2010)のうち、①学生生活や学習習慣等の自己・時間管理能力、②大学という場の理解、③人として守るべき規範理解、④大学の中での人間関係構築、⑤大学で学ぶためのスタディスキル(文献検索・レポート作成)、⑥大学で学ぶための思考方法、⑦能動的で、自立・自律的な学習への転換、を学習内容としている。

キャリア教育科目としては、12回以降の授業で「キャリア教育の視点」を取り入れ、将来を見通して大学生生活の計画を立てる授業となっている。低学年から取り組むキャリア教育のスタートとしての役割を果たしている。

大学で学ぶための思考方法としては、コルブの体験(経験)学習の学習方法と主体的な学びを取り入れている。体験学習では、授業内での活動(体験)に続いて、振り返りの記述により内省・概念化を行い、その後の授業内で学習内容を活用するという学習のステップを繰り返し行い、習慣化することを目指している。主体的な学びを身に付けるためには、協同学習をベースとしたアクティブ・ラーニングを行い、自分で考え、発言し、他者の意見を聴き、さらに考えるというプロセスを重ねていく。

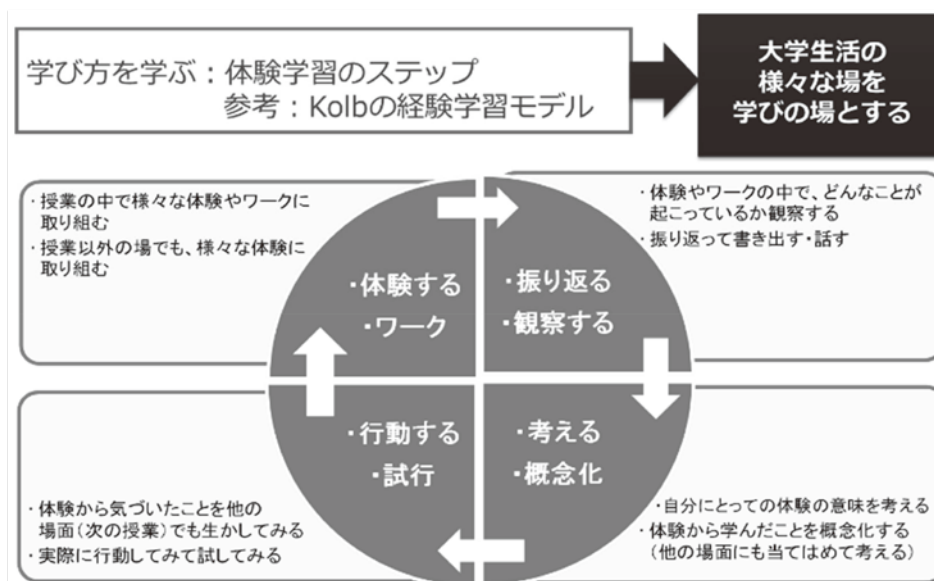


図2 「自立と体験1」体験学習のステップ

3-4. 授業デザイン

(1) 15回のデザイン

15回の授業は、3節に分かれている。第一節では、多様な他者と出会い、関わり方を学ぶ。第二節では、第一節での学びを活かしてグループで活動し、大学での学びのスタートを切る。第三節では、卒業後もイメージしながら、大学生活4年間を見通し、計画を立てる。学習の過程で複数回のグループ替えをしたり、教室外の様々な人と出会うことで、人と関わる自信をつけていく。

表1 15回の授業デザイン

第一節 人と関わる	1	オリエンテーション
	2	新しい環境で他者と出会う
	3	大学での学びを考える
	4	聴いて相手を理解する(1)
	5	聴いて相手を理解する(2)
	6	ルールとマナーを考える
第二節 人と関わる・学びのスタートを切る (ローテーション授業)	7	明星大学を知る
	8	明星大学を紹介する
	9	図書館にふれる
	10	大学職員に取材する
	11	自分や相手の大切さを知る
第三節 大学生活を見通す	12	卒業生から学ぶ
	13	仕事と自分について考える
	14	これからの大学生活を描く
	15	未来の自分へのメッセージ

※第二節は、大教室や図書館で複数クラス同時に実施する授業が含まれるため、ローテーション授業とし、クラスごとに授業の順番が変わる仕組みとなっている。

(2) 1コマのデザイン

毎回の授業は、①ねらいと授業内容の確認、②個人ワーク(テーマについて個人で記入)、③グループでの活動、④全体で発表、⑤振り返り、という基本パターンで進行する。授業内で体験学習のサイクルを回し、授業内容について学習するとともに、「学び方」を学ぶことを目指す。

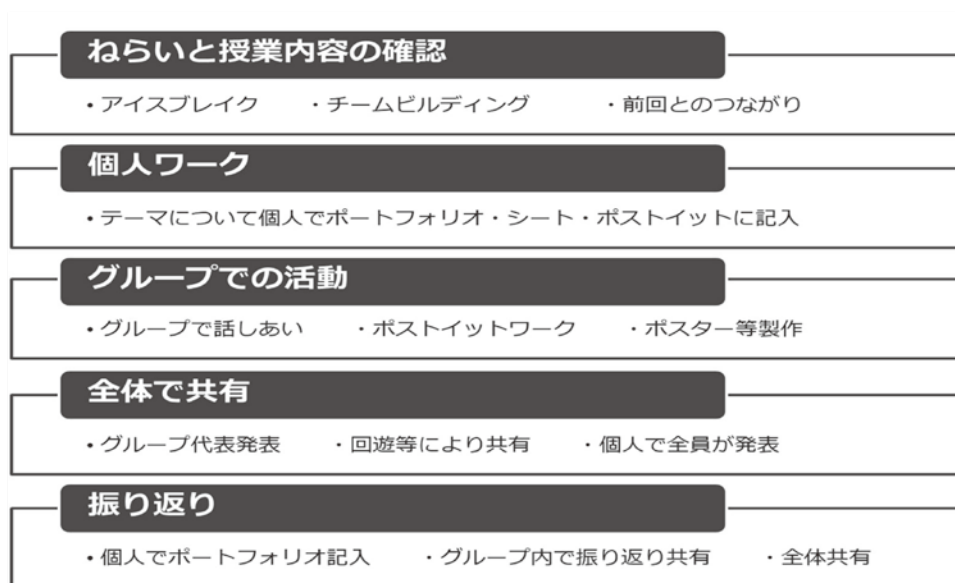


図3 「自立と体験1」1コマの授業デザイン

3-6. 明星教育センターの役割

本授業を主管している明星教育センターの役割は、①教案・ポートフォリオの作成・改訂、②授業内配付資料等教材の準備、③使用資材(模造紙・マーカー等)の準備、④全学同時実施のための代講の手配、⑤SA／TAの募集・教育・手配、⑥担当教員サポート、⑦授業成果検証のためのアンケート等の実施である。こういった業務を一括して行うセンターとセンター所属の教職員の存在は、本授業実施のために欠かせない要素の一つである。

授業運営に関する具体的な取り組みの主なものは、以下のとおりである。

(1) SA・TA／SAコーチ

各クラスには、1～2名のSA・TAが配置され、教員のサポートをすると共に、より1年生に近い立場で学習のサポートを行う。毎年350人近くのSA希望者がおり、100名程度が実際にSA業務に就く。

学生同士のピアサポートとして、SA経験のある上級生がSAコーチとして新任のSAをサポートしている。授業内では、1年生をSAがサポートし、SAをSAコーチがサポートするというピアサポートのプロセスの実現を目指している。

SAに対しては、希望者を対象にSA業務を行う際に活用できる「コミュニケーション研修」を実施した。内容は、ストロークスキル、スピーチスキル、ファシリテーションスキルである。また全員に対して、「業務説明会」を実施し、SA業務を行う上での心構えや具体的な業務内容について説明した。

(2) 学生サポート(補習・出席促進)

2010年度から2016年度まで、15回の授業で到達目標を達成し単位修得ができなかった学生を対象に、集中講義型の補習を実施した。初年次教育科目としての到達目標を、1年次のうちに学生に修得させることを目指した仕組みである。2017年度以降は、15回の授業内で学生に学習を完結させることを目指す方向に転換したため実施を取りやめている。

出席促進の取り組みとしては、2回連続欠席した学生に確認の電話連絡を実施した。出席に関する注意喚起と共に、支援が必要な学生へのアプローチ手段の1つとしての意味も持たせていた。この電話連絡も2020年度からは実施を取りやめた。これにより学生たちは自分で管理して1年次に「自立と体験1」を履修し、単位が修得できなかった場合は、次年度に再履修するというようになった。

(3) 担当教員サポート(事前研修・ニュースレター・ランチミーティング)

担当教員全員に対して、「事前説明会」を実施し、授業のねらい、授業内容、運営サポート体制、支援が必要な学生への対応について説明を行った。初めて「自立と体験1」を担当する教員向けに「授業手法説明会」を実施し、アクティブ・ラーニング型の授業を実施するための手法についての研修を行った。

また授業開始後は、毎週の授業実施上の連絡やティップスの共有のためにニュースレターを発行した。またランチミーティングとして、担当教員がお互いの実践についての情報交換をする場を設けた。両方の取り組みも、「自立と体験1」の授業実施経験者が増えてきたことから、2020年度以降は、一律に実施する形から必要に応じて必要な人をサポートする方向に変更した。

担当教員には、サポート役のセンター教員が付き、連絡事項・質問への対応、連続欠席学生への対応等、個別のサポートを実施している。今後はさらに、「自立と体験1」経験者と初めて担当する教員とは、異なるサポートを行う予定である。

4. 2020年度の実施状況

4-1. 授業実施に関する変更点

2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、対面での授業実施ができなかった。「対面で」「小グループで」「アクティブ・ラーニングを実施する」この授業において、非対面で授業を行うことは、大きな困難が想定された。具体的な対応方法としては、次の取り組みを行った。

(1) 非対面授業への対応（授業内容の変更）

第7回（6月5日6日）までは、当初の授業順序を変更し、学習管理システム（Learning Management System、以下 LMS）での実施が可能な授業回を中心に実施した。第8回以降は、LMS 課題のみで学習目標が達成できるように、授業を組みなおした。また、より学習を深めたい学生向けの「+a」として、Zoom（オンライン会議ツール）と LMS を併用した授業案を作成し、希望する担当教員に提供した。

表2 2020年度の15回の授業デザイン

回	授業名	元の授業回	実施方法
1	オリエンテーション①	1	LMS によるオンデマンド
2	オリエンテーション②	1	
3	新しい環境で他者と出会う・大学での学びを考える	2・3	
4	明星大学を知る	7※	
5	聴いて相手を理解する	4	
6	ルールとマナーを考える①	6	
7	自分や相手の大切さを知る	11※	
8	ルールとマナーを考える②	6	クラスごとに実施方法を選択 (担当教員判断)
9	明星大学を紹介する	8※	
10	卒業生から学ぶ	12	
11	自分の特徴を知る	13	LMS によるオンデマンド Zoom と LMS 併用
12	これからの大学生活を描く	14	
13	未来の自分へのメッセージ	15	

※7回～11回の授業回は、元のシラバスでは複数クラス同時に実施する授業（ローテーション授業）であったため、2020年度は実施が難しくなった。そのため授業内容を大きく変更し、一部の授業は実施を見送った。

(2) オンライン上でのアクティブ・ラーニング実践のための工夫

授業実施方法に関して次の変更を行い、明星教育センターから担当教員へ連絡・サポートを行った。

- ・レポート課題の設問を工夫し、振り返り、概念化を促す。
- ・担当教員に毎回のコメント（クラス全体または学生個別）を依頼する。
- ・レポートの相互閲覧をシステム化して、他者との関わりをつくる。
- ・掲示板・プロジェクト機能を活用し、他者との関わりをつくる。
- ・自校教育に関する映像教材を作成する。
- ・希望クラスにおいて、Zoom 授業を併用して、学生同士の交流の場をつくる。

(3) 担当教員への追加サポート

さらに、担当教員に向けて、次のような追加サポートを行った。

- ・全クラスに共通の LMS 教材（コースニュース・レポート課題）を一括して提供した。

- ・従来より MEC 教員が「グループリーダー」として 10 クラス程度を担当し、教員サポート体制を取っているが、今年度は担当クラス全ての課題設定等をグループリーダーが行った。
- ・Zoom 授業を実施する教員向けに、参考教材 (PPT) を提供。ブレイクアウト機能については練習会を実施した。練習会は全 4 回実施し、担当教員 12 名が参加した。

5. データで見る「自立と体験 1」

「自立と体験 1」の 11 年間のデータを表わしたのが、以下の表である。

表 3 11 年間の「自立と体験 1」

年度	受講人数	出席率	単位修得率	担当教員数		SA/TA 数	SA コーチ数	協力部署数
				専任	MEC 他			
2010	2,092	82.7	93.9	45	6	40		5
2011	2,151	84.9	91.4	46	6	52		7
2012	2,021	85.1	94.0	45	7	51		12
2013	2,141	84.5	93.8	45	7	68		13
2014	1,989	85.2	93.6	43	9	83		13
2015	2,187	85.5	93.4	43	12	92	5	13
2016	2,160	86.7	95.1	41	12	102	9	14
2017	2,148	86.5	94.0	41	12	94	6	14
2018	2,126	86.5	95.1	39	14	82	9	15
2019	2,024	87.1	95.2	39	13	88	9	15
2020	2,105	91.6	93.2	37	11	76	10	0

※単位修得率は、2010-2016 年度は補習を含めた数値、2017 年度以降は正規授業のみの数値。

※担当教員数の MEC 他には、MEC 専任・常勤教員のほかに、非常勤講師を含む。

※ SA/TA は、2020 年度は非対面授業により配置しなかったため、配置予定人数。

※ SA コーチは 2015 年度より導入。2020 年度は非対面授業により配置しなかったため、配置予定人数。

※ 2020 年度は非対面授業により、学内部署に協力を依頼しなかった。

6. 「自立と体験 1」の成果と今後の展望

6-1. データで見る成果

(1) 出席率：11 年間の平均 86.0%

(2) 単位修得率：11 年間の平均 93.9%

(3) 高い学生評価 (授業内アンケート)

- ・学生の自己評価は、「自分の意見を筋道立てて話す」「自分の意見を文章でわかりやすく表現する」「明星大学の歴史や教育の特色を知っている」「大学の図書館の利用方法を知っている」の 4 項目で 10 年連続プラスに変化している。
- ・授業の特徴に対する評価は、「少人数クラス」「グループでの学習活動」「他学部・他学科の学生との交流」が役に立ったかという 3 つの設問で、2010 年度から 2019 年度までの 10 年間の平均の肯定的回答が 90% 超であった。

6-2. 学内の変化：間接的な成果

(1) 離籍者の減少（他の要因も含む）

「自立と体験1」が開講する前の2009年度入学者の4年在籍率は、66.3%であったが、2016年度入学者のそれは、78.1%と大幅に改善した。また同様に3年在籍率は、2009年入学者73.7%、2017年入学者86.6%となっている。この離籍者の減少には他の施策の効果も考えられるが、1年生前期に履修する初年次教育科目の効果も大きいと考えられる。

(2) 学生の課外活動活性化

ボランティア活動、インターンシップ参加者数、クラブ・サークル加入率において、それぞれ数値の向上が見られ、学生たちの正課授業以外の活動が活性化していることが分かる。

(3) アクティブ・ラーニング型学習方法を体験した教員・学生の増加

「自立と体験1」の授業を担当した学部学科の専任教員の延べ人数は11年間で464人に達している。さらにこれらの教員が、学部の授業でもアクティブ・ラーニング型学習方法を取り入れるようになっている。

6-3. 学外からの評価

①表彰

- ・『教育学術新聞』（日本私立大学協会 平成26(2014)年2月12日付）の企画「教授法が大学を変える」の事例として選定（27校中2大学のうちの1つ）
- ・JAED Good Teaching Award 表彰（日本高等教育開発協会（JAED））
- ・初年次教育学会「教育実践賞」第1回最優秀賞を受賞
受賞テーマ『教職学協働で進化する学部学科横断型初年次教育科目「自立と体験1」』

教育実践賞は、初年次教育に関する実践の発展とその成果の普及によって大学教育の改善に資するために、効果的な初年次教育の実践例を学会内外に広く紹介することを目指し、2019年に設立された。独創性、適切性、有効性、汎用性、有用性の5つの観点から審査された。2019年は14大学14取組から最優秀賞1件、優秀賞3件が表彰された。

審査委員会コメントは次のとおりであった。

「9年間の取組の継続性と改善、全学的な組織的取組と浸透度、などの点に、類似の取組を行う大学にとって有益なモデルとなりうる。また、同取組を通して、進級率、離籍率、卒業率、1年在籍率などが継続的に改善していることも高く評価できる」

②学外に対する広報

明星大学の特徴ある授業として、学外に対する様々な広報の役割を果たしている。

- ・外部からの取材 8件（2013年～2019年度）
- ・学外講演等 18件（2013年～2019年度）
- ・他大学等来訪 25件（2013年～2019年度）
- ・「公開授業」実施（2016年度～2019年度）

6-4. 「自立と体験1」の今後の展望

「自立と体験1」は、開講から11年目の実践を終えた。今後の展望を考えると、明星大学の教育目標を

具現化した授業として「継続していくこと」と、時代や学生の変化に対応して「改訂していくこと」があると考えられる。私見ではあるが、この2つに分けて、今後を考えたい。

(1) 継続していくこと

①体験による学び(学び方の学習)

「自立と体験1」の授業の根幹となるのは、体験から学ぶ学び方を学習し、学生たちが大学生活の中で多くの学びを得るためのスキルを身に付けるという点である。大学4年間を通して、学内外で「実践躬行の体験教育」を実践していくためにも、初年次教育科目で、「体験(経験)学習プロセス」を身に付けておくことは必須である。特に「振り返り」は重要なスキルである。

②主体的な学び(アクティブ・ラーニング)

「自立と体験1」は、全授業がアクティブ・ラーニングの手法で実施されている。

アクティブ・ラーニングについては、中央教育審議会答申(平成26年12月22日)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～(答申)」において、「学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていく能動的学修」と定義され、「大学教育を、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、アクティブ・ラーニングに転換する」と述べられている。

2020年度はコロナ禍の中で、対面授業からオンライン授業への大幅な転換が行われたが、今後の授業形態が対面であってもオンラインであっても、アクティブ・ラーニングの必要性が減ずることは無いだろう。

③多様性からの学び

上記答申の中にもあるように、これからの時代に必要となる能力には「多様な人々と協力する」という点が含まれる。多様な人々と協力していくためには、多様性をポジティブに捉えることが必要になる。「自立と体験1」の授業は、多様性をポジティブに捉える「多様性に対する寛容度」を育成する構成となっており、この点は継続していくことが望ましい。

さまざまな背景の学生たちが、お互いに関わり合って学ぶという意味では、対面で実施されることにより、多様性からの学びは大きくなると言えるだろう。

④汎用能力の育成

「自立と体験1」では、「学ぶ力自己点検」という方法で、学習するプロセスで汎用能力を育成していく視点を取り入れている。1年生のうちから、自らのスキル育成に目を向けて「意識して行動する」ことは、その後のキャリア教育での学習との継続性という意味で、重要である。この点から、学生自らが「汎用能力を育成する」という目標を意識できるような授業構成は継続したい。

(2) 改訂のための新しい視点

①ストレッチ目標の設定～学生への期待値を上げる

2020年度のオンライン授業は、学生たちの自律性を高める効果があった。学生たちの意欲や能力を信じて、期待値を上げて、より難易度の高い到達点を設定することが、学生たちにとってのストレッチ目標となる。学生個々のストレッチのレベルは異なるので個別のフォローは必要であるが、より多くの学生たちが自分たちの成長を実感できるような目標設定を考えることが、学ぶ意欲につながると考える。

②社会に開かれた授業内容

「自立と体験1」の授業は、教室内と大学内で実施されている。70クラス2,000人の学生が受講する授業

だという点を考えると、ある程度やむを得ない点もあるが、一方、さらに社会に開かれた授業内容を取り入れることも考えられる。それは、現実の社会で今起こっている出来事をテーマとして取り上げることでもあるし、社会の新しい技術を授業内で使用してみることもあるかもしれない。そうやって社会に目を向けることは、キャリア教育の授業との連結をスムーズにするのではと考えられる。

③変化への志向性

「LIFE SHIFT」(リンダ・グラットン2016)では、変化に応じて自分を変えていく力として「変身資産」という考え方を提示した。「新しい経験に対して開かれた姿勢」である。

また、自身のキャリアを考えると、先の見えない現代の不確実性を前にして立ち止まってしまうのではなく、その不確実性を肯定的に捉える姿勢も求められる。

これからの学生たちに求められる姿勢として、この「変化への志向性」は1つのキーワードであり、今後の「自立と体験1」に求められる学習内容ではないかと考えている。

以上